

日本の文化に親しむ

「源平の雅」

2019年10月17日／国立文楽劇場

当協会の上方文化芸能運営委員会は、上方文化の伝承と振興に力を注いでいます。今回の「日本の文化に親しむ『源平の雅』」は能と長唄で構成し、2回公演で800人を超えるお客様にお楽しみいただきました。

主催：公益財団法人関西・大阪21世紀協会 上方文化芸能運営委員会
協力：松竹株式会社、株式会社アローブプロモーション
構成・演出：藤間 勘十郎



弁慶・牛若の圧巻の斬り組み

はし べん けい
半能「橋弁慶」

京都五条に剣術の腕のたつ子供がいるという噂を聞いて、自ら五条橋に向かった武蔵坊弁慶（浦田保親）は、そこに現れた稚児と戦い、敗れます。この稚児こそ鞍馬山の犬天狗僧上坊より兵法の奥義を伝授された源義朝の子牛若丸（味方慧）、後の源義経でした。そのときから弁慶は牛若の家来となり、生涯を共に送ることを誓います。

能の名作を今回は後半の二人の戦いの場面を中心に半能として上演しました。



浦田保親(左)、味方慧(右)



「義経千本桜」の平成版“道行き”

ほととぎす はなに ある さと
長唄「時鳥花有里」

藤原朝方の陰謀により兄源頼朝から追われる身となった源義経（中村鷹之資）は、家臣鷲尾三郎（尾上菊之丞）と時鳥の鳴くなか龍田の里まで逃げ延びます。そこで白拍子、傀儡師一行に出会いますが、その一行の正体は龍田の女神（中村梅彌、花柳まり草、若柳杏子）と龍田の明神（藤間勘十郎）なのでした。

「義経千本桜」の古い台本に残っていたものを松岡亮補訂、藤間勘十郎振付により松本幸四郎が復活した作品を今回は素踊りで上演。平成の時代にできた千本桜の新しい道行きとなりました。



中村鷹之資(左)、尾上菊之丞(右)



藤間勘十郎



狂言を交えた新たな演出

ふな べん けい

長唄「船弁慶」

堀川御所没落後、津ノ国尼ヶ崎大物浦まできた義経（中村鷹之資）を静御前（松本幸四郎）が訪ねてきます。今の身の上では静を同道することができないと思った義経は、静に名残の舞を舞わせ、別れを告げます。出船の時刻になり、船長（茂山逸平）は船を出しますが、平家の一門を携えた新中納言平知盛（松本幸四郎・二役）の幽霊が現れ義経に立ち向かいます。しかし武蔵坊弁慶（市川九團次）の法力により幽霊はいずれともなく消えていきます。松羽目物歌舞伎舞踊で新歌舞伎十八番の一つ。1885年11月、東京・新富座で九世市川團十郎により初演。

二世杵屋勝三郎作曲の長唄を河竹黙阿弥が改作したものです。その後六世尾上菊五郎の手により今の演出となりました。歌舞伎の名作を今回は狂言を交えて新しい演出で上演しました。



市川九團次(左)、中村鷹之資(右)



茂山逸平



松本幸四郎



松本幸四郎

撮影:近江哲平